

# 西夏のチベット文木簡

大 原 良 通

## はじめに

1972年に張義郷近くの洞窟からチベット文木簡が西夏文の文書と同時に発見された。この木簡の内容は後に詳述する如く仏典の一種である。

これまでに発見されたチベット文の木簡は、そのほとんどがロプノール（羅布泊）南岸のミラーン（米蘭）等、崑崙山脈の北側・タリム盆地の南にある遺跡から発見されたものである。これらの木簡は吐蕃がこの地方を統治していた頃に書かれたものである。現在までに発表公開されたチベット文木簡の中には仏教經典に関するものは存在しない<sup>①</sup>。

西夏にはチベット仏教の流入も認められ、しかもその支配下にはチベット系民族が多く存在する。僧侶を中心としてチベット語を読み書きできる者も多くおり、明らかにチベット語經典から訳されたと思われる西夏文經典が多数存在する。そして、国王が仏教を信奉している<sup>②</sup>にも関わらず、この時代の遺跡で発見されたチベット語經典は少ない。

このような状況において、本稿で扱うチベット文木簡は、吐蕃時代以降の遺跡から発見されたチベット文の木簡であるという事と、西夏時代下におけるチベット文の仏典であるという二重の意味で貴重である。

現在これらの木簡は、武威市歴史博物館に保管展示されており、私は1993年の夏に調査する機会を得た。発見された三枚のうち、一枚は収蔵庫に保管されたままである。博物館に展示されている二枚のうち一枚が、釈文を示すことができる程度に文字が残っている。写真撮影は不許可であり、ガラス越しに書写した。そのため現物の姿をそのまま示せないのは残念である。

本稿では木簡の釈文を試み、西夏時代におけるチベット文木簡の存在意義と歴史的背景を考察し、さらに西夏におけるチベット仏教について考察したい。

## 武威博物館のチベット文木簡

武威市歴史博物館には三枚のチベット文木簡が所蔵されている。以下、便宜上それらの木簡を武威木簡A・B・Cと呼ぶことにする。A・B・CのうちAとBの二枚が展示されている。展示されている二枚のうち、比較的文字がよく残っており、一部見にくい部分があるものの大部分の判読が可能なものを武威木簡Aとする。表面が摩耗しており、文字を判読する事が難しいものを武威木簡Bとする。

先ず、これらの木簡がどこから、どのような状態で発見されたかについて概観しておきたい。

木簡が発見された張義郷は、甘肅省武威市内より南に約60キロメートル行ったところにある中路県から、5～6キロメートル西に位置している。

木簡が発見された洞窟は、小西沟峴修行洞と呼ばれており、張義郷からさらに北の山を谷沿いに2～3キロメートル登ったところにある。

付近には、僧侶が修行に使用したといわれる洞窟がいくつか見られ、それら洞窟のある崖の上には仏塔が確認される<sup>③</sup>。

木簡の発見された修行洞（以下、修行洞とする）は、岩の割れ目に出来た自然の洞窟である一号洞と、その奥の上部に作られた人工の洞窟である二号洞からなっている。これらの洞窟からは、武威木簡 A・B・C とともに西夏時代の遺物が多く発見されている。チベット文木簡と同時に発見された多量の西夏文文書や竹筆等は、もともと二号洞に封閉されていたもので、その一部が一号洞に流れ出ていた<sup>④</sup>。つまり何らかの理由で西夏文文書と同時に武威木簡も二号洞に封閉され、そのうち一部の遺物が二号洞に流れ出たと考えられる。したがってチベット文の武威木簡も、西夏時代に西夏文の文書等とここに収められたものであると思われる。収められていた物の内容を甘肅省博物館報告の「甘肅武威発現一批西夏遺物」<sup>⑤</sup>にしたがって以下に列挙すると、

西夏文印本：字書<sup>⑥</sup>、經典。

西夏文写本：薬の処方箋、題記、經典、卜辞等。

西夏文木簡。

チベット文の印本1点と写本5点。

漢文文書：光定二年九月の記述のある物等。

竹筆、2点。

泥の塔婆：高さ7センチメートルで、梵文とチベット文が書かれている。

銅銭。

等々である。

この洞窟から発見された西夏文文書に関しては、王静如氏の「甘肅武威発現的西夏文考釈」等、いくつかの研究が発表されている<sup>⑦</sup>。修行洞と一部の文書の写真が、史金波・白濱・呉峰雲編の『西夏文物』に見える<sup>⑧</sup>。

甘肅省博物館報告の「甘肅武威発現一批西夏遺物」<sup>⑨</sup>は、チベット文木簡のことについて触れてはいないが、武威の博物館に展示されてあるチベット文木簡は、展示説明等からここから発見された物であることは確かである。おそらく報告書ではチベット文木簡を写本の数に含めているのであろう。

## 釈文<sup>⑩</sup>

① // lha chen lha dbang brgya byin ni // sku mdog dkar la 'od gzer 'phro // phyag mtshan phyag na <sup>(2)</sup>do je ge pa po bsams de la phyag 'tshal mtshod pa 'bul // dam chos gtsug lag khang sru sa □ /

天神、帝釈天は、お身体の色は白く、光が放たれ、法器として、御手に金剛杵をお持ちになり、そこに恭しく礼を奉ります。正法と寺院を守ります。

do je は rdo rje（金剛杵）の書き間違いであろう。

最後の文字は ba が入り、sru sa ba となるのが次の文章より理解できる。sru sa ba は srung ba（守る）の書き間違いであろう。

- ② <sup>(3)</sup>lha chen ma ha ka la ni // sku mdog dkar la 'od gzer 'phro // phyag na tsan dan be con bsnams de la <sup>(4)</sup>phyag 'tshal mtshod pa 'bul / dam chos gtsug lag khang sru sa ba //  
 天神、大黒天は、お身体の色は白く、光が放たれ、御手に檀香の杖をお持ちになり、そこに  
 恭しく礼を奉ります。正法と寺院を守ります。

- ③ lha chen gang 'ba bzang po ni // <sup>(5)</sup>sku mdog dkar la 'od gzer 'phro // phyag mtshan phyag na pad ma bsnams // de la phyag 'tshal mtshod <sup>(6)</sup>'bul // dam chos gtsug lags khang sru sa ba //  
 天神、満賢は、お身体の色は白く、光が放たれ、法器として御手に蓮華を持っておられます。  
 そこに恭しく、礼を奉ります。正法と寺院を守ります。

mtshod と 'bul の間に pa が抜けている。

lags は lag の書き間違いであろう。

- ④ klu chen nor bu bzang po ni // sku mdog dkar la 'od <sup>(7)</sup>zer 'phro // phyag na nor bu rin cen bsnams // de la phyag 'tshal mtshod pa 'bul // dam chos gtsug <sup>(8)</sup>□□□ sru sa ba //  
 龍神、珠賢は、お身体の色は白く、光が放たれ、御手に宝を持っておられます。そこに恭しく、  
 礼を奉ります。正法と寺院を守ります。

'do zer は非常に不明瞭で判読困難であるが、他の部分の書式から 'od gzer であることは間違いがない。

gtsug と sru の間の摩耗部分には lag lkhang が入り gtsug lag lkhang (寺院) となる。

- ⑤ klu chen klu rgyal dgas po ni // sku mdog dkar la 'od gzer 'phro // phyag na <sup>(9)</sup>□□□ □□□□□□ // de la phyag 'tshal mtshod pa 'bul //

龍神、難陀龍王は、お身体の色は白く、光が放たれ、法器として御手には、(剣を持っておられます)。そこに恭しく、礼を奉ります。

摩耗部分は、前の文章から phyag mtshan phyag na □□□□ bsnams (法器として御手には、□□□□を持っておられます) となることが理解される。一般的に難陀龍王の法器は剣であり、摩耗部分には ral gri 等の剣を表す単語が入ると思われる。

書式どおりであれば裏面には、dam chos gtsug lags khang sru sa ba // (正法と寺院を守ります。) と続く。

## 解説

### ◎ 文 体

書体は書写体 (dbu med) と活字体 (dbu can) の中間で、少し活字体に近いように思われる。また敦煌で発見されたチベット文の書体に似ているが、敦煌文書にしばしば見られるような、ギグ (gi gu) が逆さまに付いたものは見られない。シェー (shad) の前には必ずツェク (tsheg) があるのも、一つの特徴であろう。

## ◎ 内 容

木簡文中の神について説明をする。

### ① lha chen lha dbang brgya byin 。

Indra 帝釈天。サンスクリット語では、Śakra devānam indra とともに表記され、その意味は諸天の中の王である。

### ② lha chen ma ha ka la 。

Mahākāla 大黒天。現在のチベット語では一般的に Ma ha'a ka'a la として ha と ka の文字の下に長母音を示す 'a chung が付けられている。三宝を守護する武神であり、飲食を司る神であり、戦闘の神などとされる。

### ③ lha chen gang 'ba zang po 。

Pūrṇabhadra 満賢。次の nor bu bzang po とともに、Vaiśravaṇa(多聞天)の侍祭で、南にあり、右手に花瓶を持ち、左手にマンガースを持っている<sup>40)</sup>。nor bu bzang po と同じく、十六大護に数えられ、仏法および、国土衆生等を守護している。

### ④ klu chen nor bu bzang po 。

Mañibhadra 珠賢。前の gang 'ba zang po と同じように、Vaiśravaṇa(多聞天)の侍祭で、右手に宝石を持ち、左手にはマンガースを持っている<sup>41)</sup>。十六大護の一人である。

### ⑤ klu chen klu rgyal dgas pa 。

Nandah 難陀龍王。八大龍王の一人、仏法を守り、諸龍中、最も優れた者である。

①②③の神はそれぞれ名前の上に、lha chen (天神) とあり、④⑤の神には、klu chen (龍神) と付されている。特に注目されるのは、③の lha chen gang 'ba zang po と④の klu chen nor bu bzang po である。これらは同じVaiśravaṇa(多聞天)の持祭で、十六大護の一人であるにも関わらず、③は lha chen として、④は klu chen として異なるランクに位置づけられている。lha、klu という順番には、神をランク付けするためのある種の法則が存在していると考えられることから、ここにこの地方独自の宗教思想が反映されているのではないかと考える (この事については後述の「歴史背景」で再度考察する)。

全ての神の身体が、白となっているのも特徴的である。①の brgya byin や、③の gang 'ba zang po は身体の色が一般的には黄色である<sup>42)</sup>。

## ◎ 書 式

[lha chen もしくは klu chen] [神の名前] ni // sku mdog dkar la 'od gzer 'phro // phyag na [法器] de la phyag 'tshal mtshod pa 'bul / dam chos gtsug lag khang sru sa ba //

[天神もしくは龍神] [神の名前] は、お身体の色は白く、光が放たれ、御手に [法器] をお持ちになり、そこに恭しく礼を奉ります。正法と寺院を守ります。

となり、[神の名前] にしたがって [法器] が替わるだけで、ほかの部分はほとんど差異がない。同じような書式のものが『護法尊の大海の伝記 (bstan srung rgya mtsho'i rnam thar)』にあり、田中公明氏がすでに訳<sup>43)</sup>しているので、その満賢と珠賢(宝賢)の部分を示す。

Gang ba bzang po sku mdog ser / ci dgos nang nas 'byung ba yis (sic.) / bum pa bzang po  
phyag na bsams / lho phyogs gnas la phyag 'tshal lo //

満賢 Purnabhadra は身色黄色、何でも入用の物を内より取り出す。賢瓶を手に持つ。南方に住する者に敬礼す。

Nor bu bzang po zla rgyas mdog / phyag g-yas yid bshin nor bu yis / 'gro ba'i re ba rdsogs  
mdsad pa / nub phyogs gnas la phyag 'tshal lo //

宝賢 Manibhadra は満月の色。右手の如意宝珠にて、諸趣（の衆生）の意願を満たし給う。西方に住する者に敬礼す。

この經典の書式は

[神の名前] [色] / [法器] / [方向] phyogs gnas la phyag 'tshal lo //

[神の名前] は、[色] 色で、[法器] を持つ。[方向] に住する者に敬礼す。

となり、この二つの書式を比較してみると、『護法尊の大海の伝記』には lha chen（天神）と klu chen（龍神）の区別がないことや、文章の最後の「dam chos gtsug lag khang sru sa ba（正法と寺院を守ります）」という言葉が無いなどの僅かな相違点を除いて、酷似しており、同じ種類の經典に属すると考えられる。

### ◎ 形 状

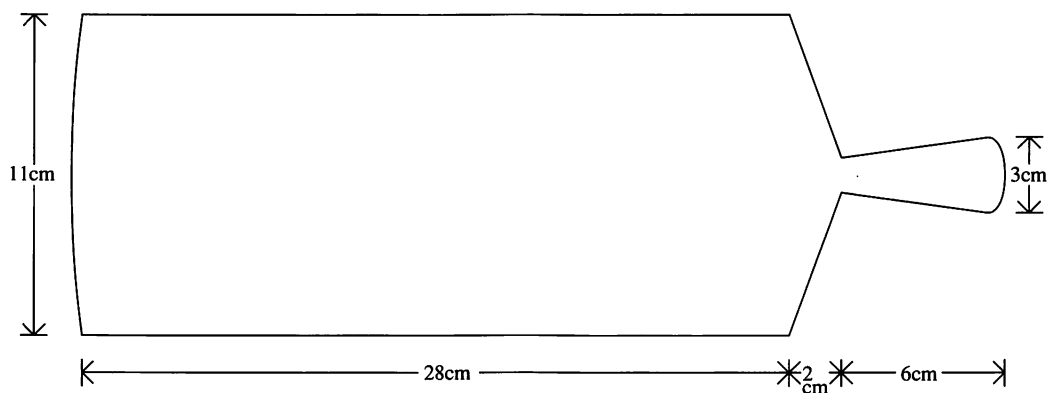


図1 武威木簡 A

310 44 20031-M0044

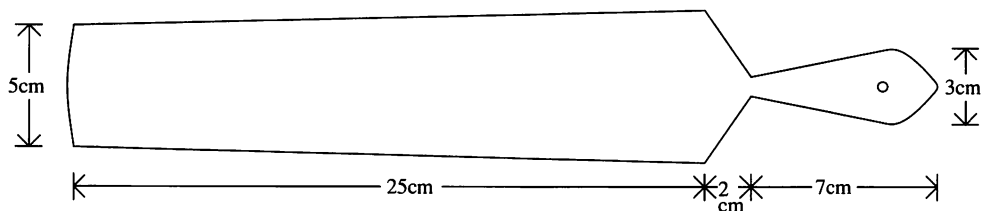


図2 武威木筒 B

809 043 2003109-N043

チベット文木簡は、ロンドンにスタイン募集品が約2300点、新疆维吾尔自治区博物館所蔵品が78点、サンクトペテルブルグのマロフ募集品が57点ほどあり<sup>35</sup>、その他にも中国国内で新たに発見されたものなどがある。『吐蕃簡牘綜録』には464本の木簡が紹介されている。その内訳は、新疆维吾尔自治区博物館所蔵のものが78本とスタインのものが380本とマロフのものが6本である。そのなかには宗教関係のものが25本あるが、そのほとんどがボン教関係の木簡である。仏教經典と思われるものは1本も存在しない。『新疆歴史文物』には新疆维吾尔自治区博物館所蔵の一部の木簡の写真とその長さが紹介されている<sup>36</sup>。スタイン収集のものは幅・長さ共に知られている<sup>37</sup>。また、青海省都蘭県で発掘された吐蕃時代の古墳二基の内、第十号墓から発見された11枚の木簡がその写しと共に発表されている<sup>38</sup>。以上の木簡の一般的な形状は、厚さ0.2～0.3センチメートル、幅約2センチメートルである。長さは長短いろいろあるが、墓から発見されたものには、10.5センチメートル以上のものは無い。右端近くに穴のあけられているものも多い。スタインのものは幅約2センチメートル、長さは10～13センチメートルぐらいのものが多く、右端近くに穴のあけられているものも多く存在する。これらの木簡の中には概略図で示した武威木筒AとBに類似した形状のものはみられない。写真等が公開され、その形状がわかるチベット文木簡は少なく、武威木筒と同じような形状のものが今後発表される可能性はあるが、管見の限り類似したものは無く、チベット文木簡としては非常に特殊な形状であるといえる。

あえて、武威木筒と形状の類似するものを求めるとするならば、ニヤ遺跡から出土したカローシュティー木簡がそれに相当する<sup>39</sup>。カローシュティー木簡は4世紀まで使われたとされており、この武威木筒とは時代的に大きなズレがある。ただ、非常に似ているので、カローシュティー木簡を再利用したのではないかとも思われるが、それを裏付ける証拠はない。

### ◎ 木簡の埋蔵年代

修行洞から同時に発見された文書の中には人慶・天盛・乾祐・天慶・光定という西夏の年号がみられ、その最も古いものは西暦1145年のものである。それら文書の中で、年代が判明している最も新しい物は、光定2（1212）年の漢文文書で、光定は西夏の神宗の年号である<sup>40</sup>。これらの事からこの洞窟は、西夏の中・晩期の遺跡に属するとみられている。1227年にモンゴルによって西夏は滅ぼされており、しかも元代の遺物がまったくないことから、1212年より降ること数年の間に、二号洞が封閉されたとみられる。それと同時に武威木筒も封閉された。

## 歴史背景

涼州（今の武威）は、唐末に吐蕃の範囲に組み込まれ、その後一時的に唐に復帰するが、五代から遼にかけて再びチベット系民族の支配する地域となる<sup>20</sup>。『宋史』吐蕃伝の前半部分は、この涼州を中心に活躍した涼州吐蕃について記している<sup>21</sup>。涼州吐蕃は、天聖6～7（1028～9）年、西夏によって西涼府を逐われている<sup>22</sup>。

武威周辺へのチベット仏教の影響は二度認められる。一度目は、10世紀中頃におこなわれたラングルマ王の廃仏によって、チベットから相当数の仏教信者がこの地域に逃れてきたと考えられるものである。二度目は西夏においてチベット仏教が重要視され、チベット語仏教經典から西夏語への翻訳がおこなわれたことによるものである。

一度目の影響は、廃仏がおこなわれている地域から仏教信者または僧侶がこの地域に逃れてきたものにすぎず、この地域の仏教自体に新しい何かをもたらした訳ではなさそうである。したがって影響としては、この地域におけるチベット族の人口増加があったと考えられる。この地域に仏教徒が逃れてきた理由としては、チベット内地の廃仏の影響がこの地域まで及ばなかったからである。たとえば mkhas pa mi gsum（3人の学者）と言われる人々がアムド地方の北にある Dan tig 山（今の青海省化隆県）の近くに逃げ、そこで宗教活動を続けたことから<sup>23</sup>、そのことが理解できる。これらのことはこの地域で吐蕃時代以来の仏教が生き続けていた可能性があるということ、非常に重要な意味を持つであろう。

次に二度目の影響について述べる。この修行洞から東南に3キロメートルほど離れた張義郷の東北には、大量の西夏文經典が発見されたことでも有名な天梯山石窟がある。この石窟は黄羊河の側にあり、北涼（397～439年）時代に開削されはじめたと考えられている。修行洞の在る谷はその一つの支流であり、天梯山石窟と同じ盆地内に位置している。この石窟からも、34件の西夏文文書と共に第七洞からチベット文書1件が発見されている<sup>24</sup>。天梯山から発見されたチベット文書についてはあまり知られていないが、その文書が印本であることから、經典の一部である可能性が高い。松澤博氏は、この天梯山石窟から発見された西夏文經典『聖觀自在大悲心總持功德經韻集』を研究し、その經典が仁宗時代（1139～93年）にチベット語から訳されたことなどから、その時期に西夏における仏教の中心が中国仏教からチベット仏教になったとした<sup>25</sup>。

ではなぜ仁宗時代にチベット仏教が西夏の主流になったのだろうか。私はその一つの原因として、チベットにおける仏教の復興が挙げられるのではないかと考える。

吐蕃のラングルマ王が廃仏を行った後、11世紀になるとチベット内地でも本格的に仏教が復興した。この頃になると、新たな教派が確立され、寺院も各地に建てられるようになり、おそらく經典も多く刷られるようになったであろう。そしてその主要で、最も古い宗派であるニンマ派が、ラングルマ王の廃仏を避けてアムド地方へ逃れてきた前述の「3人の学者」の流れを引く者達を出発点として始まったことも見逃してはならない<sup>26</sup>。

チベット内地で仏教が復興するとすぐ、各宗派の僧侶が次々と西夏を訪れている<sup>27</sup>のは、西夏にチベット仏教を広めるのに好条件であったからだと考えられる。それらのことが西夏国内において、チベット仏教が力を得る理由にもなったのであろう。ついには、皇后或いは皇太后が発願しておこなわれる大法会では、正式にチベット文經典が読誦される<sup>28</sup>。以上のように、チベット

内地の仏教復興によるものが二度目の影響である。

ただ、武威木簡は他のチベット語仏典のように紙に印刷されたものではなく、木に書写されたものであり、仁宗時代以降において新たにチベット内地からもたらされたものとは考えにくい。

木簡の冒頭の神である帝釈天に関して、1346年に書かれたとされるチベットの仏教史『Deb ther dmar po』の「ミニャクの王統」によると、

lha'i dbang po brgya byin gyi lung gis mi nyag rgyl po gcig bskos yod /

天の王である帝釈天の御言葉により、ミニャクの王が任ぜられました。

とあって<sup>93</sup>、修行洞のあるこの地方では帝釈天に対する信仰が以前よりあったことをうかがい知ることができる。

天神の次にランク付けされている龍神については、1538年に書かれたとされる<sup>94</sup>『Deb t'er dmar po gsar ma』<sup>95</sup>に、

mi nyag la shor tshul ni byang ngos dang mi nyag sga'i bar gyi ri gcig la klu bdud chen po se h'u zhes pa gcig yod pa dang / byang ngos mkhar nang gi bud med sha za'i rigs gcig lhan du 'dus pa las bu gcig skyes pa'i tshe nam mkha' la sngon med pa'i skar ma btags can shar ba mthong nas rgyas rtsis byas pas rgyal sa 'phag pa'i mi gcig skyes par shes nas thams cad skrag zer /

ミニャクを失った状況というのは、byang ngos (涼州) と mi nyag sga の間に一つの山があり、その一匹の se h'u という名の大きな悪龍と、byang ngos mkhar (涼州城) の羅刹の類の女性が結合して一人の子供を生んだ時、天空に今まで見たことの無い星が現れ、漢族の古い師が占ったところ、王位を奪うものが生まれたということがわかり、人々は恐れた。

とあり、ミニャクの王統を龍と結び付けている。

これらミニャクを西夏と解する説が有力だが、チベット語史料にみられる一連の「ミニャクの王統」の内容すべてを「西夏の王統」と理解してしまうことには疑問を感じる。なぜなら、これらの西夏の王の出自伝説が他の史料にみられないからである。西田龍雄氏は、ミニャクとはチベット人の下人になったタングート族を指し、後にチベットでは西夏全体をその言葉で代表させたとし、チベット人は下人のことを温末とか渾末とか呼んだとしている<sup>96</sup>。温末は唐代末期から五代初期にかけて特に勢力を増し、涼州(今の武威)の覇権を掌握していた<sup>97</sup>。つまりミニャクは温末に含まれる言葉だと考えられる。この地方には雑多な民族が入り交って住んでおり、その中には龍族を名乗る民族がある<sup>98</sup>。また唐代に張孝嵩なる人物が悪龍を退治して「龍舌張氏」の勅号を賜った話等があり、この地方に古くから龍に関する物語もしくは信仰があったことを窺い知ることができる<sup>99</sup>。これらのことを考え合わせると、チベット語史料にみられる「ミニャクの王統」の内容に、以前から涼州付近に住んでいた民族の伝説が、西夏の王の出自伝説として紛れ込む可能性が充分にあると考えられる。

武威木簡 A に出てくる神の名前は、多聞天の侍祭である gang 'ba zang po と nor bu bzang po



が、天神と龍神という別のランクに分けられていたり、四天王や十六大護のようなある一つのグループを示すものがなく、統一性が見られない。これらのことは、チベット仏教が張義郷地域の土着信仰と結びつき、天神と龍神というこの地方独自の神にたいするランク付けに基づいて選ばれたからではないだろうか。木簡の内容はこの地方独特の思想を反映したものだと考えられる。

## おわりに

この武威木簡 A がいつ書かれたものかという問題が残る。この經典の内容が、仏教本来の仏ではなく、護法尊である帝釈天から始まり、神を天神と龍神の二つに分けるといふ思想や、龍神を重要視しているのではないかとと思われること、などからチベットの後期仏教の影響を受ける以前に書かれたものではないかと考える。また、武威木簡 B の表面は、文字がほとんど確認できないぐらいに摩耗している。二号洞は長い間封閉されていたのであり、この木簡が二号洞に収められた後、文字が見えなくなるほど摩耗したとは考えにくく、武威木簡 B は二号洞に収められる前に、ある程度摩耗していたと考えられる。木簡に文字を写すという形態や、書体などからも古風な印象を受ける。

以上の理由で、この武威木簡は涼州が西夏に占領される前、涼州吐蕃もしくはそれ以前に書かれたものであり、この地方に住んでいたチベット民族によって、西夏の仁宗時代（1139～93年）を経て神宗時代（1211～23年）まで伝えられ、西夏文文書とともに修行洞第二号洞に封閉されたと考える。

西夏では、吐蕃時代からチベット系民族によって信仰されてきた仏教と、仁宗時代にチベット内地から新たに輸入された仏教經典の双方が存在したと思われる。この武威木簡 A はその前者、つまりチベット系民族によって信仰されていた仏教に属すると考えられる。もしこの木簡 A に対する解釈が正しければ、西夏によって新たに導入されたチベット仏教とは別に、当地のチベット人による土着信仰的色彩のあるチベット仏教の流れが存在したことになる。この西夏に支配されているチベット人達が守ってきた仏教と、仁宗時代以降にチベットからもたらされたであろうチベット文の印本が同時に発見されたと言うことは、西夏が国家的規模で導入したチベット仏教と、以前からそこで生活し西夏によって支配されたチベット族の人々が信仰してきた仏教が、同じ場所で活動していたことになる。恐らくは差異のあるこの二つのチベット仏教が、同じ場所でのように信奉されていたのか、中国仏教からチベット仏教へという国家的な宗教の流れを、被支配民族を含む庶民は、どのように受けとめていたか等々、今後研究すべき問題を多く含んでいるように思われる。

西夏文經典と、今後、武威にある他のチベット文木簡や文書が公開され、さらにこのようなチベット文文書が発見、公開されれば、なお一層この地域の歴史が明らかになる。そういう意味に於いて、この武威木簡 A が投げかけた一筋の光は今後重要さをますますものとする。

注

- ① 竹内紹人、「チベット・中央アジアの木簡」、『しにか』1991年、5月号、大修館書店。王堯・陳踐編著、『吐蕃簡牘綜録』、文物出版社、1985年。
- ② 西田龍雄、「西夏語仏典について」、『続シルクロードと仏教文化』、東洋哲学研究所、1970年。松澤博、「仁宗校訂期における西藏經典題目を有したる西夏經典に就いての一考察」、『東洋史苑』第9号、龍谷大学文学部東洋史部会、1975年。史金波、『西夏文化』、吉林教育出版社、1986年など。
- ③ 史金波・白濱・呉峰雲編、『西夏文物』、文物出版社、1988年。
- ④ 甘肅省博物館、「甘肅武威発現一批西夏遺物」、『考古』、第3期・総132期、科学出版社、1974年。
- ⑤ 甘肅省博物館、前掲論文。
- ⑥ 史金波、「『甘肅武威発現的西夏文考釈』質疑」、『考古』第6期・総135期、科学出版社、1974年で、氏はこの文書を『四言雜字』だとしている。
- ⑦ 王静如、「甘肅武威発現的西夏文考釈」、『考古』、第3期・総132期、科学出版社、1974年。史金波、「『甘肅武威発現的西夏文考釈』質疑」、『考古』第6期・総135期、科学出版社、1974年。
- ⑧ 史金波・白濱・呉峰雲編、前掲書。
- ⑨ 甘肅省博物館、前掲論文。
- ⑩ 神の名前には、アンダーランイを付し、それぞれに便宜上①～⑤までの番号をふった。チベット語をローマナイズしたものの上の丸がっこの中の数字は、原文の行数を示す。
- ⑪ Giuseppe Tucci, *Central Asian Style, Tibetan Painted Scrolls*, reprinted in Kyoto, Rinsen 1980.
- ⑫ Giuseppe Tucci、前掲書。
- ⑬ Giuseppe Tucci、前掲書。
- ⑭ 田中公明、「護法尊」、『詳解 河口慧海コレクション』、佼成出版社、1990年。
- ⑮ 竹内紹人、前掲論文。
- ⑯ 新疆维吾尔自治区博物館編、『新疆歴史文物』、文物出版社、1977年。
- ⑰ F.W.Thomas, *Tibetan Texts and Documents II*, London, 1951.
- ⑱ 王堯・陳踐著、「青海吐蕃簡牘考釈」、『西藏研究』、第3期・総第40期、西藏社会科学院、1991年。
- ⑲ M.Aurel Stein, *Ancient Khotan*, reprinted in Peking China, 1941.
- ⑳ 甘肅省博物館、前掲論文。
- ㉑ 岩崎力、「西涼府潘羅支政權始末考」、『東方學』、第47輯、1974年。
- ㉒ 長澤和俊、「遼代吐蕃遣使考」、『史観』、第57・58合冊、1960年。
- ㉓ 長澤和俊、前掲論文。
- ㉔ Helmut Hoffman, *Early and medieval Tibet, The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge University Press, 1990.
- ㉕ 陳炳応、「天梯山石窟西夏文佛經訳釈」、『考古與文物』、第3期・総17期、陝西省考古研究所、1983年。
- ㉖ 松澤博、「西夏・仁宗の訳経について——甘肅省天梯山石窟出土西夏経を中心として——」、『東洋史苑』、第26・27合併号、龍谷大学東洋史学研究会、1986年。
- ㉗ Helmut Hoffman、前掲書。

- ⑳ 史金波、「西夏仏教発展概述」、『西夏仏教史略』、台湾商務印書館、1993年。
- ㉑ 史金波、前掲書。
- ㉒ Kun dga' rdo rjes、『Deb ther dmar po』、民族出版社、1981年。稲葉正就・佐藤長訳、『Hu lan deb ther』、法蔵館、1964年。陳慶英・周潤年訳、『紅史』、西藏人民出版社、1986年。チベット語の mi nyag を稲葉正就・佐藤長氏、陳慶英・周潤年氏等は、西夏と訳している。
- ㉓ 稲葉正就・佐藤長訳、前掲書。黄顯訳注、『新紅史』、西藏人民出版社、1984年。
- ㉔ bSod nams grags pa.Deb t'er dmar po gsar ma.Roma,Istituto Italiano per IL Medil ed Estremo Oriente,1971。44a-45。
- ㉕ 西田龍雄、「西夏の文化とその研究」、『西夏文字』、紀國屋書店、1994年。
- ㉖ 前田正名、「陷蕃後、河西の漢蕃雜居に関する検討」、『河西の歴史地理学的研究』、吉川弘文館、1964年。
- ㉗ 前田正名、前掲論文。
- ㉘ 藤枝晃、「沙州帰義軍節度使始末（一）」、『東方学報』第十二冊第三分、1941年。